平成3年度磯焼け漁場緊急調査

(要 約)

桐原 慎二・山口 伸治*

青森県沿岸における磯焼け発生状況を知ることを目的に、1991年9月21日に小泊、10月25日に佐井、11月7日に奥戸・大間地先について、各々海藻生育及び植食性動物棲息状況を観察した。概要は以下のとおりである。なお、詳細は『平成3年度磯焼け漁場緊急調査報告書(小泊地区)、(佐井地区)、(奥戸・大間地区)』として各々報告した。

① 小 泊 地 区：1986年から90年にかけて小泊地先の浅所、深所の両漁場に設置された人工礁の底生生物を調べた。その結果、ウニ類の棲息密度の高い深所に設置されたものでは海藻生育量が低いのに対して、その棲息が見られない浅所のそれにはジョロモクを中心に安定した多年生群落が形成されたため、植食動物が海藻相に及ぼす影響が推察された。

② 佐 井 地 区：2年生マコンブの生育密度は1年生のそれに比べ著しく低いことから、1989年のマコンブ発生水準は低かったと思われた。調査地点は海藻生育状況から、マコンブ・ガゴメ場、多年生のホンダワラ場、海藻生育量が少ない場の3種類に分けられた。88年11月にホンダワラ類繁茂場所の一部で岩礁爆破場所がなされたが、そこには1年生マコンブの密生が観察された。これから、ホンダワラ場は、海藻相が多年生海藻へと遷移した場と考えられ、新生面の露出によりコンブ漁場への回復が可能と思われた。また、海藻生育量とキタムラサキウニ棲息密度には明瞭な負の相関が認められた。

③ 奥戸・大間地区：佐井地区と同様に2年生マコンブの生育密度は低かった。なお、調査場所における海藻群落は、水深5m以浅でツルアラメ、10m前後でマコンブ、25m前後でガゴメが各々代表的であった。ツルアラメ、ガゴメは、マコンブと生育場が競合する多年生海藻であるため、今後、マコンブ漁場におけるそれらの繁茂状況を調べ、その漁獲に及ぼす影響を検討する必要があると考えられた。

*：漁業振興課